

レベルアップした応募作品たちを振り返る

コンテストを終えて

今回で3回目を迎えた未来エレベーターコンテスト。応募作品には過去の応募作品を越えるものを提案しようという力作が多数集まった。また、今後のコンテストのありかたについても、あらゆる角度から議論がなされた。



(写真左から) 田中浩也氏/辛島恵美子氏/今村創平氏/原田豊/小林庸至氏

続けてきたことでレベルアップした作品

早いもので、2007年にスタートした東芝未来エレベーターコンテストも、今回で第3回目を迎えた。

今年の最優秀賞作品に選ばれた「東京水系2030」は、かつて作家・幸田露伴が随筆「水の東京」の中で江戸以来、東京が水の都であったことを指摘したその運河の伝統を、最新のテクノロジー技術を用いて蘇らせようという興味深い提案であったし、優秀賞となった「Endless Life Tree」も、近代都市のなかで誰もが頭の隅に追いやられ遠ざけてきた「死」の問題をむしろ積極的に捉え直し、都市の真下に墓地を作り、エレベーターで地上に生活する人たちと過去の人々の記憶を共有しようという、大胆な発想の提案であった。

この両作品についてはもちろんのこと、今回の応募作品全体について言えることは「年々レベルが上がってきているのを感じました」という田中氏の発言が要約しているように。

今回は審査の段階で、票がかなりばらける結果となったが、それについて今村氏は、

「普通のコンペであれば、まず8割程度が落ちて、残りの2割くらいで票を争うんですけど、今回票の集中が少なかったのは、優秀な作品が多かったため」と述べた。また辛島氏は「作品の刺激を受けてこちらのイメージが膨らんだ」と語り、原田氏も「中身のあふれた作品が増えた」と評価した。そして今年初めて審査員に加わった小林氏も「常識にとらわれない自由な発想が多く、感銘を受けました。審査をしていても、日頃使っていない頭を使った感じがしました」との感想を述べた。

さて、今回はテーマとして「地域コミュニティを活性化する未来の交通」、そしてキーワードとして「サステナビリティ(持続可能性)」と「コミュニティ」が設定されたが、この点が作品にどう生かされたかについては審査員から、それぞれ次のような発言があった。

コミュニティというテーマ設定について

原田「社会環境を含めてコミュニティという言葉の意味合いをしっかりと捉えた作品を出していただいたという感じがします。ただコミュニティを膨らませてほしい。」

さらにも、コンテストに応募した学生同士が、お互いの作品に対してコメントし合うのも学生間でコミュニケーションが広がって面白いのではないかと、これからの新たな展開を予感させる意見も飛び出してディスカッションは終了した。

REVIEW



自分たちの手で自分たちのコミュニティの交通手段を考えたい

人が交流する持続可能な社会に貢献する交通手段とはどのようなものなのだろうか。



森栗 茂一
MORIKURI Shigekazu
大阪大学
コミュニケーションデザイン・センター
教授

移動に「ドキドキする感覚」を期待したい

今回、未来エレベーターコンテストの受賞作品を見て、「速度や効率を求める作品が少ない」ことに非常に共感を覚えました。

私が今の都市に求めるものに挙げたいのは、「ドキドキする感覚」です。曲がりくねった道には「その先に何かがあるのだろう」とわくわくしますし、坂道は上りきった先に何かがあるのだろうと想像する楽しさがあります。

真っ直ぐな道は移動効率はいいのかもしれませんが、こうした先の見えないことによる散策の楽しみは少ないのです。

もちろん、都市とはまず「多くの人びとが集う場所」である以上、使い勝手のよいものでなければならないというのは前提条件です。しかし、人間が効率だけでは生活できない生き物であるならば、その人間が集まる都市にも、一見非効率に見える遊びの部分もまた必要な存在であると言えるでしょう。

最優秀賞の「東京水系2030」は、ビジュアルの中心に「くらげに乗った老婦人が本を読んでいる」様子が描かれています。ゆったりとした流れに身を任せて移動し、移動の時間を豊かに過ごす。隣の乗り物に乗った人との会話もできる。「出合いが期待できる交通機関」というのは、コンテストの募集対象である学生の皆さんには大変興味深いテーマかと思いますが(笑)

また、「ドキドキする感覚」という点では、「elevator park」も面白い。たくさんのシャフトで地上と地下を繋いでいるのですが、地下にギャラリーを設けて山車があるのがいい。あっと驚く感覚を移動効率を無駄にせずを実現していると感じました。この作品では舞台を東京駅前という既存の地下街が非常に発達した場所に設定していますが、人工地盤を使えば、他の都市でも実現できると思います。

持続するコミュニティのインフラには「共働」を

エレベーターやエスカレーターといった建物内を移動するための手段は、基本的に無料です。利用に際して料金が必要なものは、超高層ビルの展望台行きのエレベーターなどごく限られていると思います。

日ごろ、お金を払うこともなく何気なく使っている階段やエレベーター、そして自宅前の道路などは、実は誰かしら管理者がいて、税金や共益費という形で運営コストを負担することで、自分もその権利者の一員であるわけです。しかし、これらのインフラを「自分のもの」として認識すれば、道路にごみを捨てたり、エレベーターにいたずらしたりする人も減るでしょう。では、そのように地域住民に感じてもらうにはどうしたらいいのでしょうか。

そのために大切なのは、私は「共働」という考え方だと思っています。自宅前の街路樹を自分のセンスでメンテナンスできたり、エレベーターの清掃を当番制にしたりと、行政や管理会社に金銭で委託するだけではなく、管理に自分の汗を流すこと、そんな共働によって共感も生まれてきます。

インフラを自分の手で管理しているものと思えば、愛着も湧きます。地域住民が自分たちのものであるインフラの管理・運営に積極的に参加することで、その扱い方が変わるだけではなく、大切に扱われることで資産価値も増えるでしょう。マンションにお住まいの読者の方も多いと思いますが、普段何気なく使っているエレベーターをもう一度そんな見方で見直してはいいでしょうか。(談)

コンテストの課題と今後へ期待するもの

議論するなかでは、また新たな課題も浮かび上がってきた。今回からA3判のヴィジュアルとA4判の解説文というプレゼンテーション方法としたが、その使い分けが上手くなされていないのではなか。CGが不得意なのであれば、実際に模型を作ってそれをビジュアルとするなど、自分の得意な方法を使って構わないのだから、多様な表現方法を使った応募作品にも期待したい。

待たない。新しい技術の登場によって世界は短期間の間に変貌を遂げる、その点から考へるなら今ある技術に全くとらわれないアイデアで発想したものがあるのもいいのではないかと。提案の中に登場する人物が、大学生すなわち「自分とその仲間」に偏っていた。子ども、高齢者、障害者、外国人など、社会を構成するさまざまな人のコミュニティのあり方にまで、イメージ

ジを膨らませてほしい。さらにも、コンテストに応募した学生同士が、お互いの作品に対してコメントし合うのも学生間でコミュニケーションが広がって面白いのではないかと、これからの新たな展開を予感させる意見も飛び出してディスカッションは終了した。